誌上行学講習会

高佐日煌上人

堯舜の話、不軽菩薩の話、悉多太子の話等現証をあげて説明されております。支那の歴史を知っている方は御存知の通り、支那を文化的につくりあげた、堯、舜、禹という三代つづいて出た立派な王様があります。これらのえらい方はいささかも偏頗、即ち私心のこと、これが無く、すべての人々に平等にやさしく接していた、言いかへれば仏さまのような慈悲の心を持っていたというのであります。

堯帝についてはおもしろい逸話がありますが、或る日堯帝が一般庶民の姿になって、政治がどの程度ゆきわたり、理解されているかを探りにあるきました。すると向うから酔っぱらった百姓が鼻うたを唄って「日出て起き、井戸を掘りて飲み、耕して会う、帝国我において何かあらん」という漢詩Ⅱ太陽が昇ってから起き、井戸水で洗顔し清水を飲み、田畠を耕して生活しているのだ。決して王様なぞの世話にやなっていないという意味Ⅱを口ずさんで歩いている姿に接した。これを見て堯帝はまことに喜んだ。国民が改治を忘れる程世は太平なんだ、わしは先ず成功したのだ。とその政治に確信をもち喜んだというのであります。

その公明正大な気持はあたかも仏が衆生をあわれむが如くであるというので、人間の中から出た「人界の仏界の一分なり」、仏のような人であるというのであります。「不軽菩薩は所見の人に於て仏身を見る」というのは、法華経の第二十番目に常不軽菩薩という方が〈礼拝行〉に徹したことが説かれてあり、それによると不軽菩薩はお経を読まないお説教もしない、ただ人に会うと誰に向って手を合わせて拝む。そして「我れ汝等を軽しめず」という言葉を捧げて合掌礼拝する。即ちすべての人間を仏さまとして仰いだというのであります。「悉多太子は人界より仏身を成ず」というのは、悉多太子は〈おしゃかさまの御幼名〉人間として生まれて修行開悟して釈迦牟尼仏という仏様に成られたという意味で、これらの現証事実をもって仏界が現実に存在することを信ぜよと、日蓮大聖人は「十界の心理」を説明されたのであります。

十界の心理は日蓮大聖人によって解明されました。「百界の心理」は私、高佐日煌が研究大成した迄は世に出なかったのであります。十界の心理は日蓮大聖人の指さしておのだけでは、我々人間の心の説明をするのにはあまりに抽象的過ぎる嫌いがあります。そこで十界互具という原理を用いまして、これを百界に普遍助長すると足りない感じであります。

そうなるかというところに研究を進めたのであります。その前に日蓮大聖人の指さしておられる「十界の心理」も、もっと現実的に考えて行かねばならなくなり、十界の現実的説明をする必要を感じたわけであります。例えをあげますと「豈に人界に二乗なからんや」という言葉があります、二乗とは声聞縁覚のことであります。そしてこの二乗とは「無常を感ずる」というのですがこれをどう説明すればよいのか。こう考へて参りますとどうしてもより現実的に説明考察せざるを得なくなったのであります。